

## 『グローバル天理』第5号掲載論文要旨

### **井上昭夫： 巻頭言「自然資本主義」思想の台頭**

自然を資本と見る「自然資本主義」の新しい考え方は、自然の生態系のシステムや働きに学ぶ事によって、逆に環境や組織のあり方を改善し、人類が豊かになる方法を啓発しながら、組織に改革をもたらすモデルを提案・実践させる。筆者は本年4月にカリフォルニア工科大学で開かれた「キャンパス緑化・地域社会緑化」というシンポジウムに参加した際に、基調講演を行った研究者からこの「自然資本主義」の最新情報を得た。

### **太田 登・中井精一： 天理教原典とやまと言葉（5） 原典とその発音 [3] 一子音の特徴**

原典「おふでさき」にみられる奈良県北部方言の音声的特徴のなかから 子音の特徴について紹介する。とともに「おふでさき」に見られる音声的特徴の表記と実際の発音との関連から、「おふでさき」の表記は、当時の言語生活そのままを記述したものではなく、書き言葉などを意識したある種のけじめをつけた表記で執筆されていると考えた。

### **笹田勝之： 天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して—（5） 序章（続）「おふでさき」における用語「さとり」 [3]**

真理・天理を「知る・分かる・悟る」には、「澄んだ心・神一条の精神」、すなわち親神・教祖への「信」が要求される。そして「信」「知」「覚」「悟」も、人間的・自力的なものではなく、神による他力的なものである。

### **堀内みどり： 天理異文化伝道の諸相（5） 天理教のコンゴ伝道[4]— 出会い**

不安定さを内在したままの独立コンゴに二代真柱一行はアフリカへの第一歩を印す。一行のタクシーを運転したノソング・アルフォンソ氏の人柄は、一行の心に残ることになった。『北報南告』の記事を中心に、その消息を紹介。

### **佐藤浩司： 天理教東南アジア伝道誌（3） 戦前のフィリピン伝道 [1]**

戦前のフィリピン伝道は、ハワイ、アメリカ本土などの初期の伝道状況に似て、日清日露の戦争による経済的な疲弊という国内事情と、当時の教会運営の困難な状況の打開と理由によるものが多い。ここでは労働者としてフィリピンへ渡った、濱口丑松の場合を中心に初期のフィリピン伝道を振り返る。

#### **金子 昭： 天理経営学—その歴史・哲学・展望（5） 歴史編 天理教者の経営観 [4]**

天理教者の経営観に見られる徳の思想は、決して天理教独自のものではない。それは江戸時代の思想家・二宮尊徳の創始になる実学思想としての報徳思想や石田梅岩の創始した実践的修養哲学ともいべき心学思想にも登場する。今回は、これら経営道徳思想の紹介を行なった。

#### **佐藤孝則： エコロジーの思想と実践（5） 黄河文明の「エコロジー」**

黄河文明は、4大文明に共通した気候条件の乾燥・半乾燥地帯で生まれたと考えられてきた。しかし、黄河流域がこのような乾燥あるいは半乾燥地域となったのは、ずっと後になってからのことだと思われる。そして、今日のように黄河の渇水現象が起こるようになったのは、人災である可能性が高い。

#### **小滝 透： 天理比較神秘論への試み（5） 砂漠と森林の狭間で [2]**

今回も新宗教と伝統社会の対抗関係について考えてみた。宗教の特徴は体制にきわめて順応的であった人物が、一転、驚くべき非常識人に変身するところに存在するが、教祖もムハンマドもその典型的な例であろう。当時の時代背景を絡めながら、両者の軌跡を綴ってみた次第である。

#### **小林正佳： 芸術・癒し・宗教（5） 民俗舞踊の魅力**

民俗舞踊の動きの性質と、その性質をもった動きによって可能になる体験の中身を考察することで、具体的な癒しの営みを考察していく。

#### **金子珠理： ジェンダー・女性学情報（5） 発話のポジション**

FGS 批判の言説については様々な問題提起が可能であるが、根本的な問いは「発話のポジション」である。今回はサイド以来の他者表象の問題をふまえ、「対抗的歴史の主体＝西欧フェミニスト」という図式を批判する。

### **瀬川裕道： エコロジカル インタビュー（5） 環境マネジメントシステムと大学 [5]**

日本において ISO14001 の審査登録を受けた教育機関は 4 校である。それぞれの環境方針には、規格の要求事項に加えて、環境教育・研究活動や実践への取り組み、それを通じた社会への貢献ということが、教育機関の特徴として打ち出されている。

### **塩沢千秋： 脳死・臓器移植—カナダ通信（5） Xenotransplantation [2]**

臓器移植のドナー不足から、動物の臓器移植が考えられる様になり、既に科学者の間では研究が始められている。モザイク人間、生物的にも思想的にも、人間と言う存在が消えて行くことにならないだろうか。

### **山根 博： 宗教・スポーツ・賭け（5） くじとギャンブル—運命の社会とリスクの社会**

2001 年から導入される「サッカーくじ」法案を巡る国会あるいはメディアでの論戦において、「ギャンブル＝悪」の図式は賛成・反対両派に共有されていたことは興味深いことであった。しかしギャンブルには反対であるがくじは賛成であるという根拠はなにか。たとえ大金を失う危険はあっても、自らの選択や決断の入る余地のない、くじを買うことに抵抗がないのかもしれない。しかしすべてが自己責任に回帰してくる人為的現象であるギャンブルがなぜ受け入れられにくいのか、その一端が理解されるのではないか。

### **上杉武夫： 都市の再生に向けて—アメリカ通信（5） ニューヨークとロサンゼルス**

深刻な環境問題を抱えた巨大都市は、来る 21 世紀も生き残れるだろうか。ニューヨークとロサンゼルスに焦点をあてて、アメリカの公害や汚染に関する対応の仕方について紹介する。